2020　ｸｵﾘﾃｨ･ﾏﾈｰｼﾞﾒﾝﾄ報告会

当科における食物アレルギー診療の変遷

静岡市立静岡病院小児科
酒井秀政

緒言

- 食物アレルギーの児において、摂取可能な量を定期的に摂取することで、早期に治癒が見込まれることが複数の食材で明らかとなっている。
- このため、卵や牛乳などの日常食品については、食物アレルギーの治療法は「確かな診断に基づいて必要最小限の食物除去で留めること」である。
- 当科は2012年～食物負荷試験を行っているが、近年、食品によるアレルギー反応の閾値量を判断する負荷試験が増加している。
- 当科の診療統計から上記について考察した。

当科の最近の食物負荷試験の特色とその狙い

(準備)食べたい食材を(なるべく)児に選ばせる

当日「食べてくれない」の予防

∵アレルギー反応の軽微なものが30-60分で生じることが割とある

60分観察

リスク管理

原則2段階負荷まで
（結局閾値不明に終わらないよう）

初回負荷 → 2回目負荷 → 判定

相当のハイリスクでなければ
事前の点滴確保なし

児の負担軽減

結果に応じて栄養指導

チームでの診療

緊急薬剤、酸素投与の準備
SpO2・心拍・血圧モニター

同日帰宅

家人の負担軽減

救急車や分娩立会に呼ばれる可能性のほぼない
専属の医師が付添（片手間には実施しない）

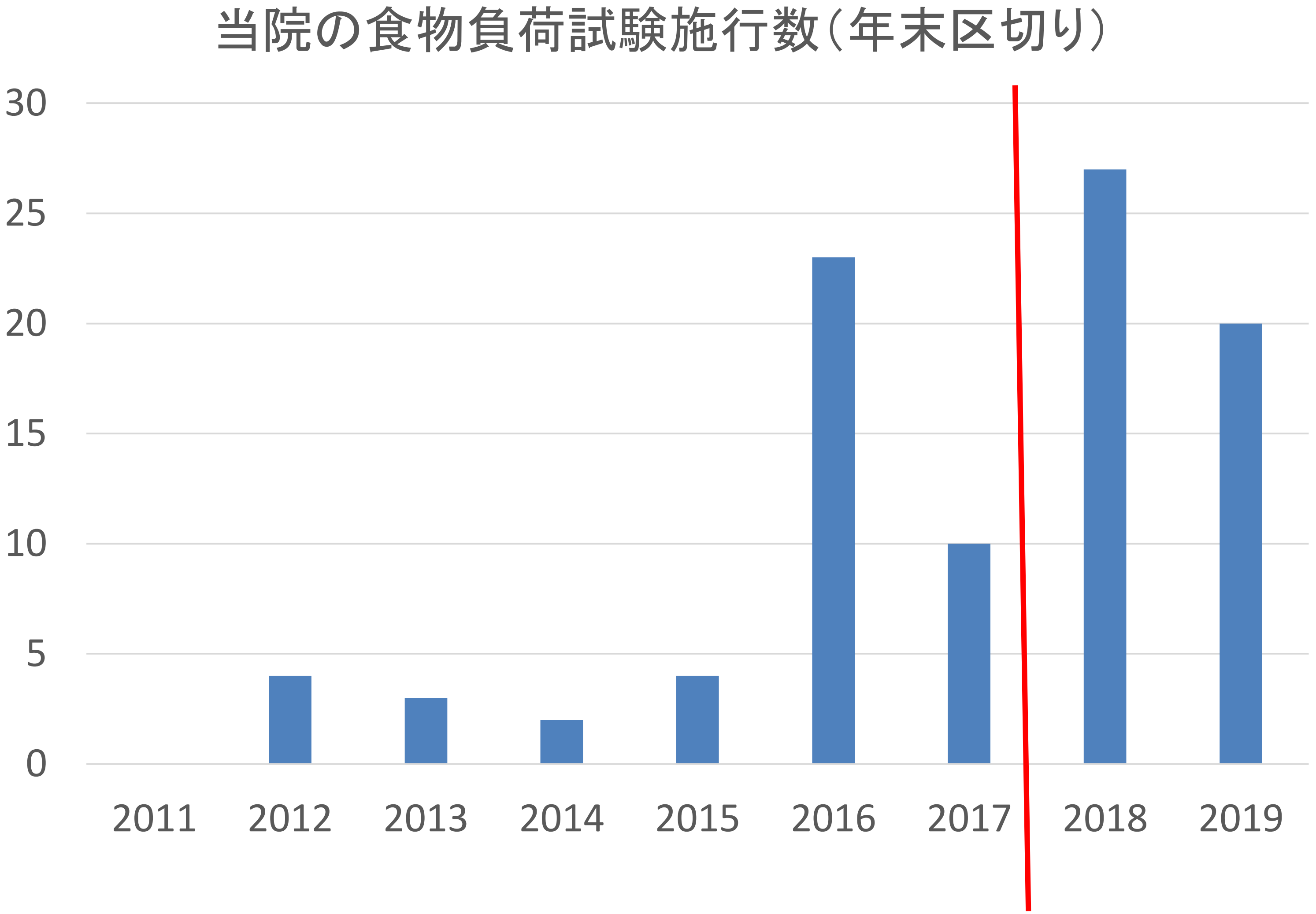
＝施行可能日は週1回

ハイリスク例では負荷試験量を少量に置き、重篤反応回避

各種最新の予測スコア等を用い
症例に応じたリスク管理

※施行の前提として食物アレルギーに関する国内外の文献/学会等で知識をup-to-date

当院の変遷を見るべく2017年までと2018年以後を比較

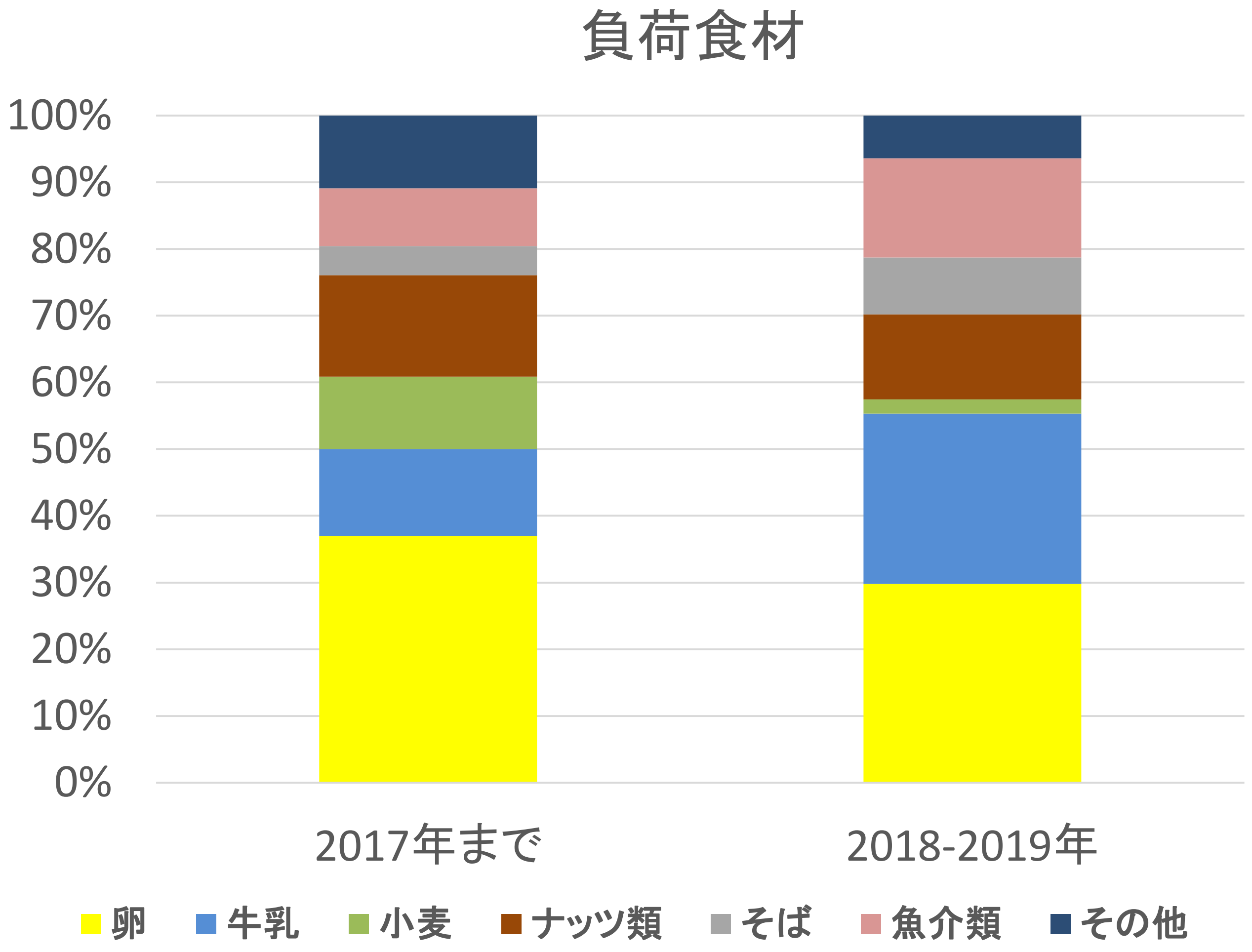


従来は学校給食に対応する年齢が中心であったが
最近は2歳以下の負荷試験例が急増している

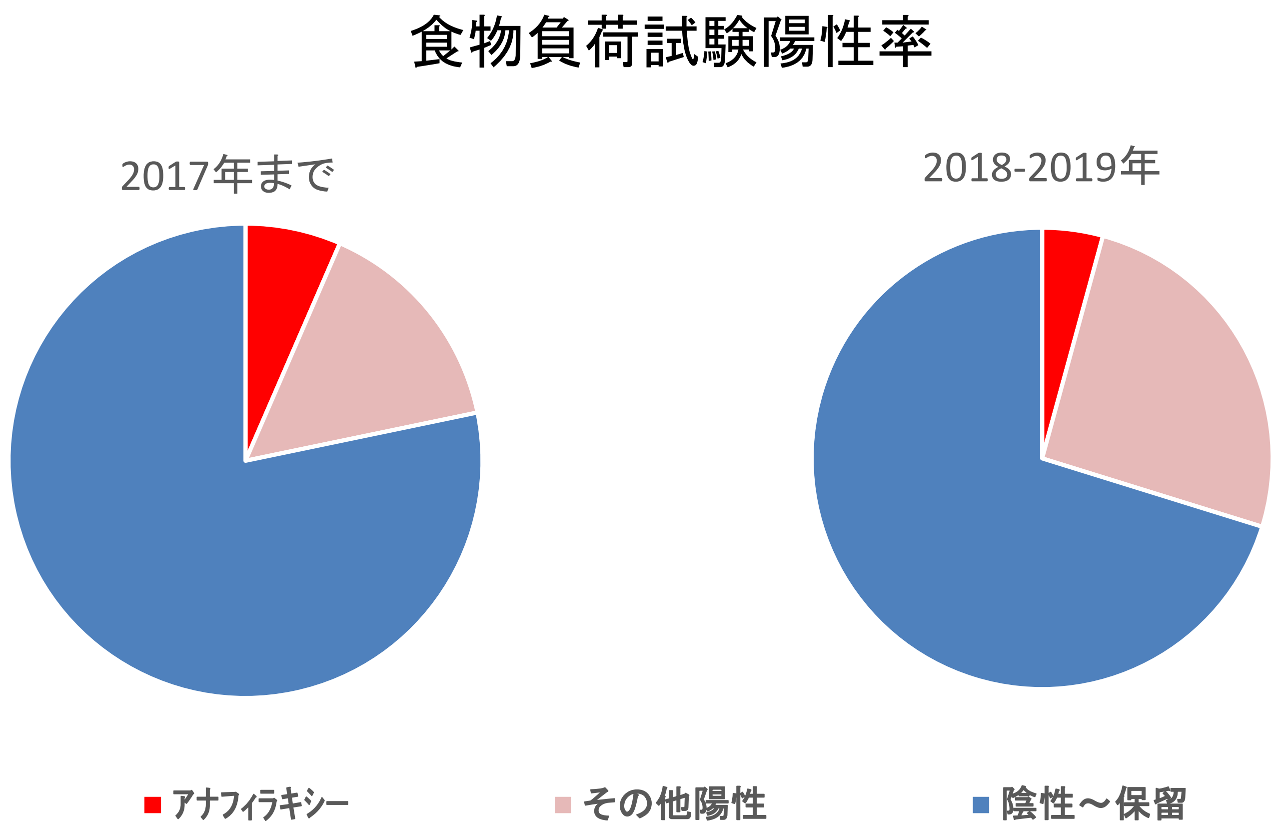
負荷試験時年齢	2017年まで	2018-2019年
0-2歳	8.7%	42.6%
3-5歳	17.4%	14.9%
6-9歳	50.0%	42.6%
10歳以後	23.9%	0%

・自分で「かゆみ」や「痛み」を表現できない
・負荷試験食材を「食べてくれない」アクシデントもありうる
・バイタル計測も途中から嫌がってしまうことも頻繁
→　パスや予定通りではなく、負荷試験中の柔軟な対応が必須

食材別では、牛乳の閾値を見る負荷試験が増加
その他、特記すべき食材として、イクラ負荷試験が増加



敢えて弱陽性を呈して閾値を見るための試験が増えている
一方で、アナフィラキシーに至る試験は減少していた
→　負荷試験の有用性を上げる一方、安全性も向上している



※アナフィラキシー例はいずれもGrade2以下

なお、当科では試験結果はコンパクトなシールでお渡しし、
目に付きやすい形で残るように工夫している。

食物負荷試験結果　　1 年　月　日

__そば__ 負荷試験において
__計 　g__ 摂取したところ
陰性　・　判定保留　・　陽性

静岡市立静岡病院　小児科　酒井秀政

シール台紙になって　　ので、お薬手帳や母
子手帳などに貼付し、　　機関受診の際にお
役立て下さい。

・陰性の場合：同じ
続けて下さい。次回
大丈夫ということで
・保留の場合：同じ
無症状なら陰性の場合
・陽性の場合：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿なら
食べられる可能性はあります。その量を保留の場合に
準じて摂取してみて下さい。

結果用紙がA4ｻｲｽﾞだと
折りたたまれて収納され
かえって目立ちにくい！

さらに、災害弱者となる食物ｱﾚﾙｷﾞｰ患者のため、
避難時用の食物アレルギー告知の名札シールを
希望者にお渡ししています。

わたしには　たべもののアレルギーがあります！

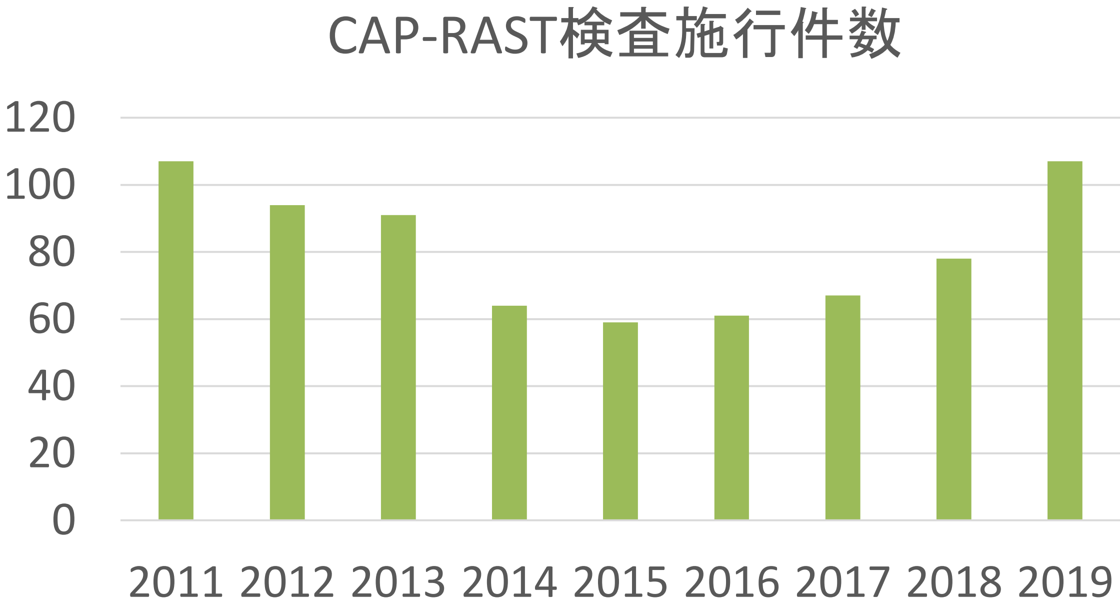
を食べると具合が悪くなります！

名前　＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿
保護者名　＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

記入日　　年　　月　　日
静岡市立静岡病院　小児科

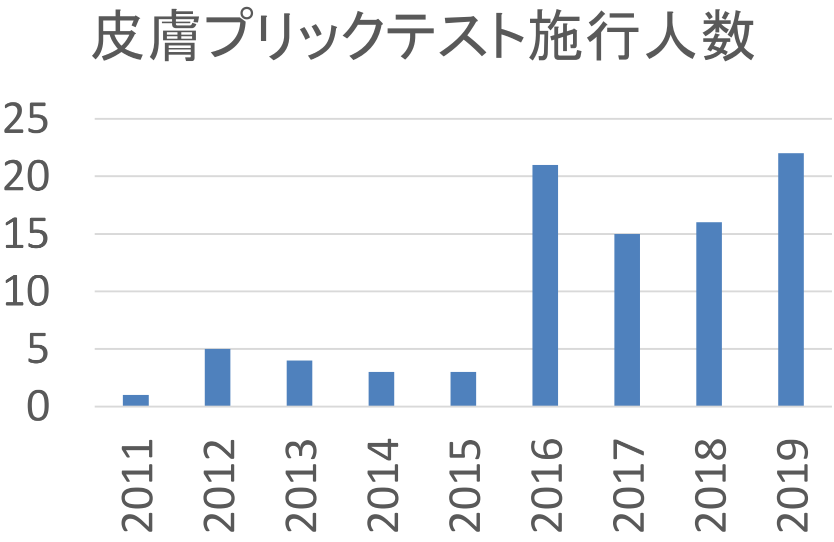
災害避難時に食物ｱﾚﾙｷﾞｰは
『好き嫌い』と誤解されやすい！

その他の食物アレルギー診療に関係する指標も増加傾向

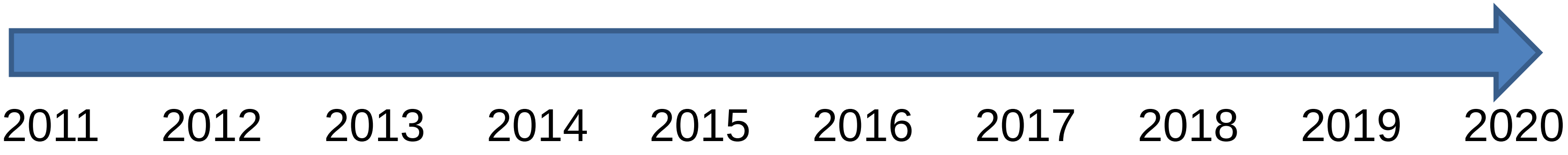


『採血だけで食物アレルギーの判定は出来ない』ことが必要以上に強調され、一時減少傾向でした。

新規アレルゲンコンポーネントの保険収載や結果解釈法の進歩、舌下免疫療法の道標目的などによって再増加しています。



今後さらに小児アレルギー診療の幅を広げていく予定

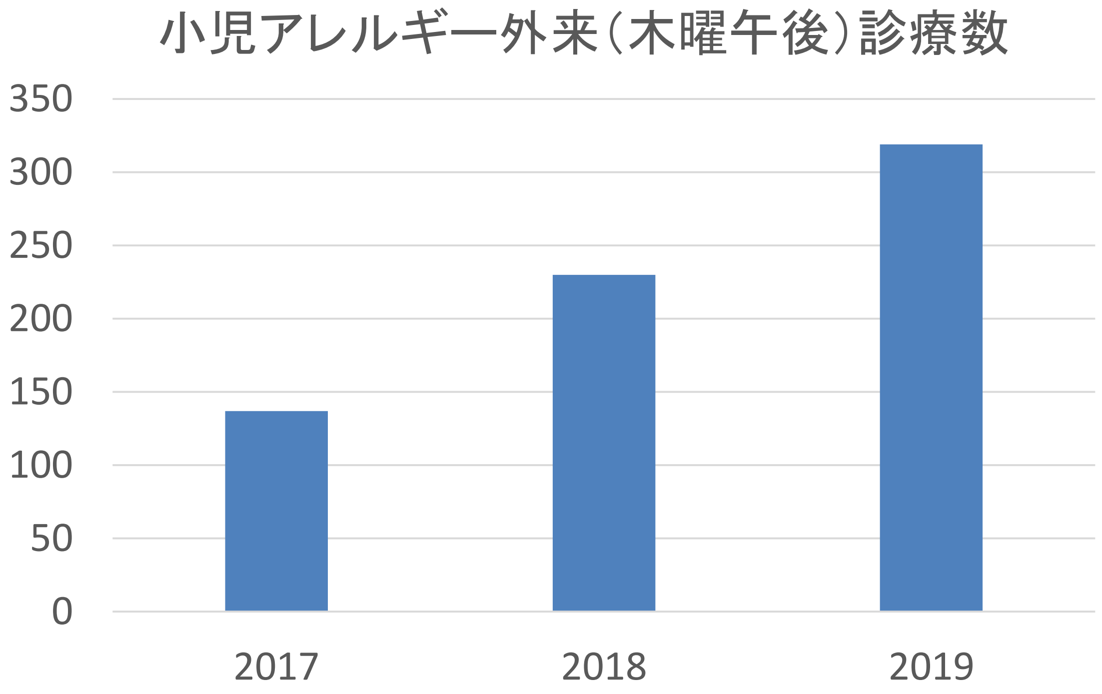


アレルギー学会
専門医1名取得

小児アレルギー
外来開設

舌下免疫療法
小児年齢適応

アレルギー専門医
（小児科）
準教育施設認定



当科で研修し、一定期間の集中セミナーを受講すればｱﾚﾙｷﾞｰ専門医取得可能！（2019年現在）

※木曜午後以外に受診のｱﾚﾙｷﾞｰ患者、
木曜午後受診のｱﾚﾙｷﾞｰ疾患以外の患者を除く

まとめ

- 当科の食物負荷試験は近年、全国的な傾向通り、低年齢からの積極的負荷を目指している一方で負荷試験の安全性は向上していた。

- 少子化の中でもアレルギー患者は増加傾向であり、今後も診療･管理レベルの維持･向上に努めたい。